

第4章 私部城と近畿の戦国期城館

中井 均

I はじめに

私部城は大阪府交野市私部に所在する戦国時代の城跡である。史料上では交野城、片野城、私部城と記されているが、現在周知の遺跡としては「私部城跡」として登録されており、これまでの発掘調査も、私部城跡として報告されていることより拙稿も、その名称に従うこととする。

さて、大阪府下では平野部に築かれた戦国時代の城館跡が、その後の開発によってほとんどが地上に痕跡を残していない。そうしたなかであって私部城跡は曲輪、空堀がよく残された城跡であった。ところが近年城跡付近では住宅開発が進み、これまで保存状況が良好であった城跡自体も危機的な状況となっている。

そこで中心部分を保存し史跡指定を目的として発掘調査が実施されたのである。その結果は報告書で述べられている通りであるが、拙稿ではその成果をもとに私部城跡が近畿の戦国期城館でどのような位置付けができるのかについて分析をおこないたい。

II 構造的特徴

構造

私部城跡は、段丘の先端に選地する平城である。その構造は主郭、二郭、三郭が空堀を隔てて連立する、連郭式縄張りとなっており、主郭には「城」、二郭には「天守」と呼ぶ小字が残されている。この三つの曲輪が中心となり、南方には本丸池と呼ばれる堀跡が残されており、この堀が城の南限と考えられる。北方には百々川が流れ、これが自然の堀の役目を果たしていた。さらに北方には免除川が流れ、両河川間は深田（湿田）となっており、やはり自然の防御施設となっていた。また、三郭

の西側、現在の交野郵便局付近も微高地となっており、曲輪の痕跡と考えられ、ここが城の西端と考えられる。一方、東側も二郭のさらに東側に空堀を隔てて曲輪の痕跡が残り、ここが城の東端と考えられる。

なお、城の南東部に突出して光通寺が位置している。この光通寺に残された寛文4年（1664）の棟札に、「破光通之寺壁仏閣墮地勝境威」とあり、光通寺が私部城主安見氏によって破却されたと記している。破却した後には私部城の一画に取り込まれた可能性がある。

信長の攻城戦

さて、私部城で註目できるのは、『信長公記』に登場することであろう。元亀元年（1570）の条に「高屋に畠山殿、若江に三好左京大夫、片野に安見右近、伊丹・塩河・茨木・高槻、何れも城々堅固に相抱へ」（10月20日条）と記されており、高屋城に畠山昭高が、若江城に三好義継が、私部城に安見右近が、さらに伊丹城、塩河城、茨木城、高槻城が織田信長方として堅固に構えられていたと記している。そして元亀3年（1573）には「去程に、三好左京大夫殿非儀を思食立ち、松永弾正・息右衛門佐父子と仰談らはれ、畠山殿に対し、既に鉾楯に及ばれ候。安見新七郎居城交野へ差向け、松永弾正取出を申付け候。其時の大将として、山口六郎四郎・奥田三川兩人、勢衆三百ばかり取出に在城なり。信長公より、討果すべきの旨にて遣はさるゝ御人数、

佐久間右衛門・柴田修理亮・森三左衛門・坂井右近・蜂屋兵庫・斎藤新五・稲葉伊豫・氏家左京亮・伊賀伊賀守・不破河内・丸毛兵庫・多賀新左衛門
此外、五畿内公方衆を相加へ、後詰として御人数

出され、取出を取巻き、しゝ垣結まはし置かれ候処に、風雨の粉れに切抜け候なり。三好左京大夫殿は若江に楯籠り、松永弾正は大和の内信貴の城に在城なり。息右衛門佐は奈良の多門に居城なり。」とある。三好義継が信長に背き、松永久秀とその息子久通と謀って、河内守護畠山昭高を攻め寄った。その際に安見新七郎の居城である私部城に対して、攻城戦用の付城としての取出を構えて城攻めをおこなったのである。この私部城攻めに対して織田信長はすぐさま松永勢を討つべく、佐久間信盛、柴田勝家らの家臣をはじめ、五畿内の將軍の奉公衆も加え、取出を取り巻く「しし垣」（鹿垣）を廻らせたという合戦が繰り広げられた。

さて、このように力攻めではなく、取出（付城）を築いたり、包囲網の鹿垣を築く攻城戦は元龜年間頃からの織田軍の恒常的な戦法となる。

ほぼ同じ頃に信長によって攻められた佐和山城（滋賀県彦根市）では、『信長公記』元龜元年七月朔日条に「七月朔日、佐和山へ御馬を寄せられ、取詰め、鹿垣結はせられ、東百々屋敷御取出仰付けられ、丹羽五郎左衛門置かれ、北の山に市橋九郎右衛門、南の山に水野下野、西彦根山に河尻与兵衛、四方より取詰めさせ、諸口の通路をとめ、」と記されている。浅井長政軍の磯野丹波守員昌が立て籠もる佐和山城を織田信長軍が攻めたときの状況である。佐和山城を鹿垣で囲い込み、四方に取出を構えて攻めており、私部城攻めの取出を攻めた状況とまったく同じ戦法である。この佐和山城攻めについては、四方の取出のうち東の百々屋敷の取出と、北の山の取出の遺構が残されており、『信長公記』の記述が信頼できることを物語っている。ただ鹿垣に関してはその痕跡は残されておらず、土塁ではなく、柵列であった可能性が高い。

この合戦後に信長が木下藤吉郎と樋口直房に宛てた書状には、「佐和山おさへの諸執（取）出之道具共、兩人かたへ可預置候、小谷表之普請之用ニすべく候、」とあり、佐和山城攻めに用いた取出の用材を兩人に預けるので、今度はそれを小谷

城攻めの取出の普請に用いよと命じている。攻城戦のための取出の構築はいかに早く造るかが最大のポイントとなる。そのため鹿垣や取出構築に必要な用材は事前に準備されており、築くときにはそれらを持参して組み立てたもののようである。つまり鹿垣や取出は現代のプレハブ工法によって築かれたわけである。そして攻城戦が終了するとそれらは解体され、次の戦場に運ばれたのである。

私部城攻めの取出を囲う鹿垣や佐和山城攻めに築かれた鹿垣は、現在その痕跡を残していない。これは破壊されて残っていないのではなく、残らないような構築物であったと考えられる。それは柵列であり、2つの攻城戦で構えられた鹿垣とは、柵列を廻らせるものであった。

ところがその後の鹿垣は土塁へと変化するようである。例えば元龜元年から4年までの小谷城攻めで、同3年に信長は姉川南岸の横山城から、姉川を越え小谷城に相対する虎後前山に本陣を築く。この虎後前山について『信長公記』には「虎後前山より宮部迄路次一段あしく候。武者の出入のため、道のひろさ三間々中に高々とつかせられ、其へり敵の方に高さ一丈に五十町の間築地をつかせ、水を閑入れ、往還たやすき様に仰付けらる。」（元龜3年（1572）8月8日条）と記している。深田で足元の悪いところに、信長は幅3間（約6m）もの軍用道路を築いたのである。この道路は小谷側に対しては高さ1丈（約3m）もの土塁を築き、敵に軍勢の移動を見られないようにしていた。さらに敵側には道路に沿って水堀まで掘られた。

同様の土塁は天正5年（1577）から8年にかけておこなわれた播磨三木城攻めでさらに巨大化する。毛利方に与した別所長治の立て籠もる三木城を攻めるために信長方は三木の周辺に30ヶ所以上に取出を築いて包囲した。特に毛利方からの物資が運び込まれる三木～魚住間の道路を封鎖する目的で幾重にも土塁が築かれた。この土塁を三木の多重土塁と呼んでいる。『播州征伐之事』には「依之為塞三木魚住通路。始君峯廻之付城五六十。其

透々立番屋。堀。柵。乱杭。坂茂木。表引荆棘裡浚堀。」と記されていたが、実際に発掘された二位谷奥付城跡の土塁では土塁の基底部に2条の溝が掘られていた。おそらくその溝間に礫が詰められていたものと考えられる。

さらに天正9年の鳥取城攻めでは鳥取城を包囲する土塁線はほぼ完成し、包囲網は土塁と付城によって鳥取城を囲い込んでいる。『信長公記』には「とつとりの東に、七・八町程隔て、並ぶ程の高山あり。羽柴筑前守彼山へ取上り、是より見下墨、則、此山を大將軍の居城に拵へ即時にとつとりを取りまかせ、頓て又、二ヶ所のつなぎの出城の間をも取切り、是又、鹿垣結ひまはしとり籠め、五・六、七・八町宛に、諸陣近々と取詰めさせ、堀をほつては尺（柵）を付け、又、堀をほつては塀を付け、築地高々とつかせ、透間なく二重・三重の矢蔵を上させ、人数時の面々等の居陣に、矢蔵を丈夫に構へさせ、後巻の用心に、後陣の方にも堀をほり、塀・尺を付け、馬を乗りまはし侯ても、射越の矢にあたらぬごとくに、まはれば二里が間、前後に築地高々とつかせ、其内に陣屋を町屋作りに作らせ、夜るは手前々々に篝火たかせ、白中のごとくにして、廻番丈夫に申付け、海上には警固舟を置き、浦々焼払ひ、丹後・但馬より海上を自由に舟にて兵糧届けさせ、此表一着の間は、幾年も在陣すべき用意生便數次第なり」と記される。

また、翌10年から始まった備中高松城攻めでも同様である。一般的に高松城攻めは水攻めと呼ばれているが、基本的には土塁を構築して高松城を囲い込む攻城戦であった。

このように鹿垣と呼ばれていた包囲網は土塁へと変化する。それは柵列から土塁への進化であった。文献史料に登場する鹿垣は現地に遺存しておらず、おそらく柵列であったと思われるが、土塁の上にも柵が廻らされていたものと思われる。そうした柵や柵列間に構えられた井楼櫓の用材が常に準備されており、攻城戦が始まると組み立てられたわけである。

ではなぜ力攻めをせず、こうした時間と労力のかかる包囲網を構築したのであろうか。元亀の小谷城攻めでは、『信長公記』に「然りといへども、大谷（小谷）は高山節所の地に候間、一旦に攻上り候事なり難く思食され、」（元亀元年（1570）6月28日条）と、巨大な山城に力攻めは極めてリスクの高かったことを記している。このために包囲戦が選択されたわけで、それはできるだけリスクを避けるためであった。まさに自軍の損傷を出来る限り最小限に止めるための戦いであった。

織田・豊臣軍が多用した包囲網の初源が元亀の佐和山城攻めや、私部城の戦いで構えられた鹿垣であった。さらに私部城で注目されるのは、単なる攻城戦に用いられたのではなく、私部城を攻める松永軍の取出を攻めるために後詰として鹿垣を廻らせたという、二重の包囲網戦が繰り広げられたのであった。

ところで松永軍の取出はどのあたりに築かれたのであろうか。こうした臨時的な陣城については地元に伝承を残すところが少なく、松永軍の取出に関しても地元には伝承をまったく残しておらず、不明である。ただ、私部城の南方約700mに位置する私部南遺跡で検出された23-15溝は谷を背後にコの字状に廻るもので、幅は5.1m、深さ2.41mを測る。その断面はV字形の薬研堀で、溝の内側角度が50度、外側が40度となる。報告書では、「一度溝内に入ると上がることが非常に難しい斜度である。」と記している（註1）。遺物が出土しておらず、時代を限定するのはむづかしいが、大きくは中世の遺構であり、断面の形状から城館遺跡の空堀の可能性が高く、距離的には私部城の相城として築かれた取出の堀である可能性は高い。なお、この溝は埋土の堆積状況より内側から一気に埋められており、そうした行為からも臨時的な取出の堀の可能性が高い。

なお、私部南遺跡が松永方の取出となると、信長軍が包囲網として築いた鹿垣はさらにその外方を廻る長大な施設であったこととなる。

Ⅲ 私部城跡出土の瓦

私部城跡の発掘調査成果でもっとも注目されるのは瓦の出土である。織田・豊臣系城郭の特徴は石垣、瓦葺き、礎石建物という3つの要素が備わった城ということができる。戦国時代の城は軍事的な防御施設であり、山を切り盛りして築いた土の城であった。それが織田信長の小牧山城、岐阜城、安土城の築城によって革命的な変化を遂げたのである。戦うだけの城から、天下人の居城として見せる城へと大きく変化する。城は統一政権のシンボルとなったわけである。

しかし、一方で16世紀の初頭にはこうしたパーツを城に取り入れる地域も出現する。石垣については信濃の松本周辺、美濃、北近江、南近江、西播磨、東備前、北九州、そして三好長慶によって築かれた城などである。瓦に関しては畿内、備前、北部九州などで寺院の瓦を城郭に導入している。礎石建物については全国的に認められるものの天主（天守）に相当する施設は認められない。

そうした織田・豊臣系城郭の大きな特徴のひとつである瓦が私部城跡から出土したことは注目される。これは単に私部城跡の特徴というだけではなく、日本城郭史にとっても重要な問題である。ここでは織田信長の安土築城前後の近畿における城郭の瓦について概観しておきたい。

さて、まず最初に安土築城前後に築かれた城で、瓦が出土した城跡としては、河内〔交野城跡、津田城跡、本丸山城跡、若江城跡、烏帽子形城跡、飯盛城跡〕、摂津〔有岡（伊丹）城跡、池田城跡、芥川山城跡、高槻城跡〕、山城〔田辺城跡、鹿背山城跡、勝龍寺城跡〕、大和〔多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡、椿井城跡〕、近江〔坂本城跡、小谷城跡〕、播磨〔三木城跡、置塩城跡、御着城、豊地城跡、恒屋城跡〕などがあり、全国的にも密集する地域であることがわかる。ここではそれらについて簡単に触れておきたい。

河内

・私部城跡（大阪府交野市私部）

私部城跡から出土する瓦については本報告に詳細に述べられているところであるが、その出土状況は本郭に集中しつつも城跡全域から出土しており、瓦当も出土していることより、城郭の建物の多くが本瓦葺きであったことを示している（註2）。軒平瓦の紋様からはこれらの瓦が16世紀中～後半に製作されたことが明らかにされている。吉田知史氏の分析によって私部城跡出土軒平瓦は、永禄5年（1562）銘瓦が出土した大坂本願寺（石山本願寺）の軒平瓦よりやや後出し、若江遺跡27次C地区堀3より出土した軒平瓦よりはやや古いものであることが確認されている。さらに北河内や摂津、奈良などの在来の瓦であることも明らかにされている。

こうしたことより、私部城跡から出土した瓦は織田信長の影響を受けたものではなく、在来の瓦を安見氏が居城に導入したことは明らかである。

・津田城跡（大阪府枚方市津田）

津田城は標高286.5mの国見山の山頂付近に、津田氏によって築かれた山城といわれている。昭和31年に津田町史編さんに伴い、城跡の最高地点を発掘したところ、地表下30cmに焼土層が広がっており、その下15cmで地山となり、その底部付近で瓦片と貿易陶磁の出土したことが報告されているが、詳細は不明。文献史からは、永禄11年（1568）に三好三人衆方であった津田城が松永久秀、三好義継方へ寝返り、義継が津田城に入城している。その後、信長を離反した久秀が元亀4年3月に津田城に入ったことがわかっており、津田城が久秀にとって重要な城であったことがわかる。

ただ、城跡と推定される場所は削り残したと見られる土塁状の高まりによって三方が囲まれている。

るが、背後に堀切も設けられておらず、戦国期の山城としては疑問も残り、ここが久秀の津田城とは断定できない。あるいは山岳寺院の可能性もあり、出土した遺物もそうした寺院に伴う可能性も視野に入れて検討すべきである。

・本丸山城跡（大阪府枚方市津田）

国見山の北西山麓に位置する本丸山に位置する城跡で、古くは津田正時が津田落城後に築いた城と伝えている。この本丸山はほぼ全域が発掘調査されており、戦国時代の堀や石組、丸瓦の暗渠、平瓦の暗渠、焼土塊などが検出されている。出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などがあつた。吉田知史氏の分析によれば、軒平瓦は勝龍寺城跡出土の軒平瓦に酷似しているが、本丸山城跡出土の軒平瓦がよりシャープとし、北河内に系譜が求められるとする。また、鬼瓦は宝珠文鬼瓦で、戦国期特有の鬼瓦とし、やはり勝龍寺城跡出土の宝珠紋鬼瓦より先行する瓦とした（註3）。

ところで本丸山城跡そのものの評価であるが、この城を私部城攻めの際に松永久秀が築いた相城のひとつではないかと考えられている。『多聞院日記』元龜3年（1572）4月29日条にある「一、昨夜ツタノ付城落居了云々、実否如何。」のツタ（津田）の付城が本丸山に想定されるのである（註4）。確かに松永氏が大和から河内に進出するには国見山を越えた場所ではある。ただ、本丸山城跡も戦国期の城郭としてはイレギュラーな構造を示しており、この遺跡自体を城館遺跡と断定することには疑問が残る。さらに相城にしては豊富な遺物が出土しており、その点も付城としては疑問が残る。

国見山の山頂部が城郭として疑問だとすることにより、この本丸山こそが津田城ではないかとする考えもある。

筆者は詰の山城として国見山に単郭の小規模な城を築き、その山麓に居館として築いたものが本丸山遺跡ではなかったかと想定している。本丸山

もすべてを城館遺跡として扱うのではなく、屋敷地として階段状に平坦地を構えたものと考えられる。

いずれにせよ、出土した瓦は元龜2年以前のもので、安土城に先行する瓦と評価できるものである。

・若江城跡（大阪府東大阪市若江本町・若江北町・若江南町）

若江遺跡は弥生時代から戦国時代までの複合遺跡である。若江城跡もこの若江遺跡に含まれている。

さて、若江城は室町時代に河内守護を世襲する畠山氏の居城として築かれ、河内守護所となった城である。実質的には守護代遊佐氏によって築かれたものと考えられている。応仁の乱によって畠山義就は守護所を誉田屋形に移す。

永禄11年（1568）に上洛した織田信長は、三好三人衆に対立していた三好義継を河内北半国守護として若江城に入れ置いた。しかし義継は後に松永久秀とともに反信長方となったため、天正元年（1573）信長は佐久間信盛に命じて若江城を攻めさせた。若江城では若江三人衆が信長方に内応したため、義継は自刃し、城は落城した。その後若江城は若江三人衆によって支配される。

さらに信長は大坂本願寺攻めの前線基地として若江城に在陣している。本願寺との和解後、廃城となったようである。

城跡は地上に痕跡を一切残しておらず、城跡推定地付近ではこれまで100次近い発掘調査が実施され、中心部には幅5mを超える溝によって東西140m、南北150m規模の方形区画が確認されている。その溝から大量の瓦や土壁の下地、礎石が投棄された状態で出土しており、城割りによって破却されたものと考えられる。

出土した三巴文軒丸瓦は珠文が31を数え、巴は頭が接し、尾は長いという特徴を持つ（註5）。元龜2年（1571）の勝龍寺城跡の瓦に類似する。

宝珠文の鬼瓦は両側の周縁部に円形文を押しており、本丸山城跡出土鬼瓦に酷似する。こうした特徴より天正元年の信長本陣よりも古い様相を呈しており、三好義継段階の若江城に葺かれていた瓦と考えられる。

・烏帽子形城跡（大阪府河内長野市喜多）

烏帽子形城の初見は、文正元年（1466）に、畠山義就が河内金胎寺城に出陣し、押子形城に兵を向けたと記された『経覚私要鈔』である。その後、畠山義就系の基家、義央、義堯と、畠山政長系の尚順、植長、高政が烏帽子形城の争奪戦を繰り返す。

天正3年（1575）に織田信長は高屋城に三好康長を攻め落とすと、河内国内の破城をおこなうが、烏帽子形城は信長の配下となった畠山氏家臣の烏帽子形衆によって支配されていた。豊臣秀吉は天正11年（1583）に中村一氏を岸和田城主とし、翌12年には「同（8月）四日、河内国高屋城ノ奥、ゑはしがた（烏帽子形）と云古城普請、筑州より被仰付由にて、中孫平人数にてコサル、ニつきて、」（『宇野主水日記』天正12年8月4日条）とあるように、すでに廃城となっていた烏帽子形城を中村一氏が羽柴秀吉の命令によって普請している。これは烏帽子形城を紀州根来寺攻めの拠点として改修したものであった。

この烏帽子形城跡では昭和61年以来数次にわたる発掘調査が実施されており、主郭からは礎石建物が検出されるとともに、瓦が出土している。出土した瓦は14～16世紀に製作されたもので、14世紀の瓦は周辺の寺院瓦が転用されたものと考えられている。三巴文軒丸瓦は三巴文の外側に圈線を巡らせるもので、その外側には23個の珠文を配している。巴文は頭部が離れ、尾は圈線とは接していない。また、軒平瓦には波状文が認められる（註6）。こうした特徴より瓦は、永禄5年（1562）に畠山高政が三好長慶に敗れた後、天正12年（1584）の中村一氏による改修までの段階、

特に三好三人衆による支配段階の可能性が高く、安土城に先行する瓦と考えられる。

・飯盛城跡（大阪府大東市北条・四条畷市南野）

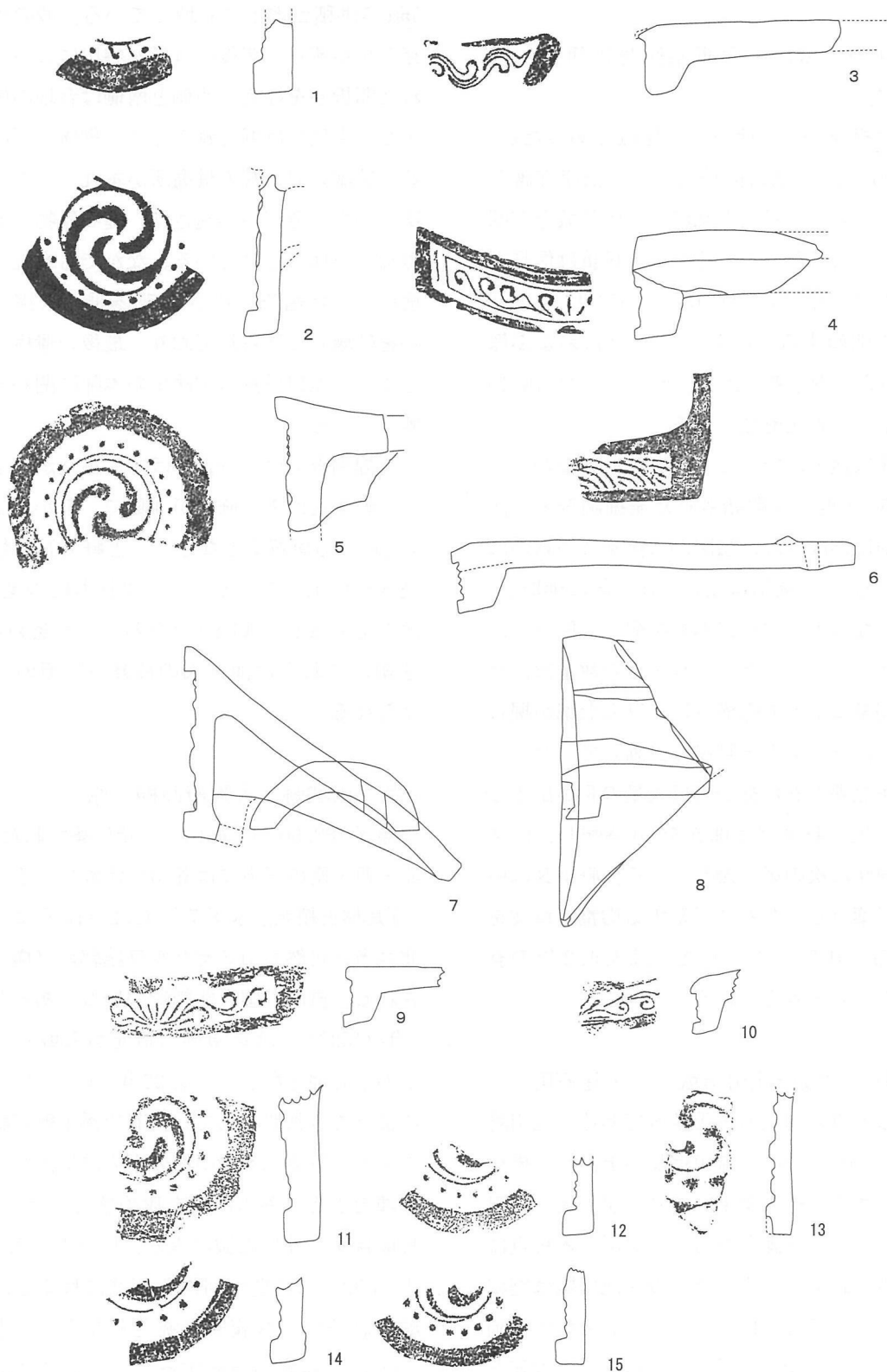
飯盛城は天文年間に畠山義堯が河内支配のために木沢長政に命じて築いた山城である。永禄3年（1560）に三好長慶が芥川山城より飯盛城に入り居城とするが、その4年後の永禄7年（1564）に城内で没した。

その後、三好義継や三好三人衆も飯盛城にいたようであるが、織田信長の上洛後は畠山昭高に与えられる。昭高が遊佐信教の反乱で討たれると、信長は飯盛城を攻め、天正4年（1576）頃に廃城となる。

現存する城郭遺構は永禄3年に入城した三好長慶によって築かれたものと考えられる。広大な山城は北方の防御空間（北城）と、南方の居住空間（南城）から構成されており、近年の分布調査によって北城の大部分が石垣によって構築されていたことが明らかとなっている。安土城に先行する石垣として、同じ三好長慶の居城である芥川山城とともに注目される。

1981年には南城の千畳敷と呼ばれる一画でラジオ局の中継無線基地造営に伴う発掘調査が実施され、かわらけ、瓦質土器、陶器などとともに瓦片が出土している。山城でかわらけが出土するのは山城に居住施設のあったことを雄弁に物語っている。飯盛城では長慶が水論調停をおこなったり、千句を詠んだりしており、山城が社会、文化の中心であったことがわかる。こうした住む山城はこれまでの戦う空間としての山城像を大きく覆す結果となった。

この飯盛城跡からは発掘調査で出土した瓦以外にも数点の瓦片が採集されている。小片の丸瓦片で、年代を決定するのはむづかしいが、コビキ痕はA手法であり、天正11年（1583）以前の瓦と見られ、まず三好長慶時代の瓦と見てよい。



1～4：交野城跡、5～6：烏帽子形城跡
7～8：有岡城（伊丹城）跡、9～15：池田城跡

0 20cm

第1図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（1）

摂津

・有岡（伊丹）城跡（兵庫県伊丹市伊丹・宮ノ前・中央）

伊丹城は摂津の国人伊丹氏の居城であったが、天正2年（1574）に織田信長によって摂津守護となった荒木村重が伊丹氏を滅ぼし、伊丹城を有岡城と改名して居城とした。その後、村重は信長を離反したため、信長は天正6年（1578）12月より有岡攻めを開始する。村重は11ヶ月におよぶ籠城戦を戦うが、内応者が出て、天正7年（1579）10月に落城し、その後廃城となる。

その遺構は地上にほとんど残されていなかったが、昭和50年度より開始された発掘調査と、江戸時代初期に作成された絵図から徐々に明らかにされつつある。その構造は段丘の縁辺部に選地し、段丘崖面となる東辺中央に本丸を配し、段丘上に惣構を構えている。また、これまでの数十回にわたる発掘調査によって惣構内にも巨大な堀が掘られ、城下町には武家地と町屋を区画していた。

本丸の西北隅の石垣裾からは大量の瓦が出土している。三巴文軒丸瓦は珠文を20個配し、巴文の尾は圏線状に次の尾に接している。軒平瓦は中心飾りを三葉とし、左右に三転する均整唐草文を配している（註7）。こうした瓦は天正2年の有岡城段階のものと考えられる。

・池田城跡（大阪府池田市城山町・建石町）

池田城は北摂の国人池田氏居城である。池田勝正は永禄11年（1568）に織田信長が上洛し、摂津進攻を開始すると織田傘下となり、伊丹氏、和田氏とともに摂津三守護となるが、家臣荒木村重によって追放されてしまう。その後、池田城は廃城となるが、天正6年（1578）から開始された有岡城攻めに際して、織田信長が「古池田」を本陣としたことが『信長公記』に見え、その「古池田」が池田城であったと考えられる。最終的な廃城は有岡落城後のことであろう。

城は五月山から南方へ張り出した標高35～

55mの洪積台地上に立地している。城の西側には猪名川が流れ、背後には杉ヶ谷川によって形成された開析谷を控え、西側と南側は台地の崖面を利用し、東側には堀を廻らせて、惣構を形成している。城域の北西端の最高所が本丸で、これまで数回にわたる発掘が実施され、礎石建物、虎口、石垣などが検出されている。なかでも本丸の中央で検出された幅7m、深さ2.5mを測る大溝は礎石建物を破壊して造られており、最後の遺構であることより、織田信長の古池田の本陣に関わる遺構と考えられる。

発掘調査では、少量ではあるが瓦が出土している。軒平瓦は中心飾りが9葉で、下から2本目が3反転する唐草文となる。三巴軒丸瓦は数種類の型式が出土しているが、いずれも巴の尾は長く、次の尾と接して圏線状となるものも認められる（註8）。これらは池田氏の最終段階頃のものと考えられる。

・芥川山城跡（大阪府高槻市原）

標高182.6mの三好山の山頂に築かれた山城で、北・西・南の三方には芥川が流れている。

『瓦林正頼記』永正7年（1520）10月に「芥川ノ北ニ当リ可然大山ノ有ケルヲ城郭ニソ構ヘ」と記される、摂津の国人能勢氏の居城であった。天文2年（1533）には管領細川晴元が入城し、畿内政治の中心地となる。天文22年（1553）に三好長慶によって入れ置かれていた芥川孫十郎が謀反をおこすと、長慶は芥川山城の東方に位置する帯仕山に陣を敷き、芥川山城を攻め落とした。その後、長慶自身が芥川山城に入り、居城とする。永禄3年（1560）に長慶が河内飯盛城に移ると、芥川山城は息子の三好義興が城主となるが、永禄6年（1563）に義興が急死すると、三好長逸が城主となったようであるが、永禄11年（1568）に織田信長が摂津に進攻し、高槻の天神馬場に陣取り、芥川山城を攻め落とした。信長は摂津三守護和田惟政を城主とする。惟政は後に高槻城へ移ると、芥

川山城には家臣の高山友照を入れた。元龜2年(1571)に惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子惟長が高槻城主となるが、これを機会と、高山友照・重友が惟長を追放して高槻城に入り、芥川山城は廃城となった。しかし、近年の発掘で17世紀前半の遺物が出土しており、高山氏は高槻城の支城として維持していた可能性がある。

城の構造は、三好山の山頂に本郭を配し、南尾根筋に階段状に曲輪を配置する。この本郭部と谷を隔てて、東側の頂部に出丸と呼ばれる曲輪群が構えられ、さらに堀切を隔てて東側に方形区画された曲輪群が構えられている。東端は自然の谷筋が入り、帯仕山と完全に分離されている。

本郭と出丸間の谷筋が大手であったと考えられ、谷筋の中腹には谷を塞ぎ止めるように巨大な石垣が構えられている。また、出丸の帯曲輪にも石垣が認められ、要所は石垣によって構えられていたようである。

2次にわたる発掘調査のなかで、本郭の調査では礎石建物が検出されている。建物は束柱を伴っており、縁を廻らせた建物であり、山上に御殿の施設の存在していたことが明らかとなった。この建物から瓦は出土していない。

出丸の北側帯曲輪より三巴文軒丸瓦が1点採集されている。瓦は灰色を呈し、胎土は粗い。巴の尾は長く、次の尾に接して圈線状となる。珠文も密である(註9)。

・高槻城跡(大阪府高槻市城内町)

高槻城は三好長慶が芥川山城を居城としたときに支城として、入江氏が入れ置かれていた。

織田信長の摂津進攻後、摂津三守護のひとりと田惟政が芥川山城から高槻城を居城としたため、この頃より摂津支配の拠点の城郭として整備されたようである。惟政が白井河原の戦いで戦死すると、息子の惟長が城主となるが、芥川山城に居た高山友照、重友(右近)父子に追われ、高山父子が高槻城に入った。

豊臣政権下で、天正13年(1585)に高山重友が船上城に移されると、高槻は一時秀吉の直轄地となり、その後新庄直頼が城主となる。関ヶ原合戦後は徳川氏の直轄地となり、元和元年(1615)に内藤信正が入城すると近世城郭に大改修され、以後明治まで存続する。

その構造は本丸、二ノ丸を並立させて内堀で囲い込み、その外郭に三ノ丸を配置し、それらを外堀が囲むという輪郭式の縄張りであった。

本丸の発掘調査によって石垣の基底部下より梯子胴木と呼ばれる石垣構築の基礎が検出され、近世城郭の石垣構築技術が明らかにされた。また、三ノ丸の外堀からは杭列と横木からなる護岸施設が検出されるなど、近世城郭の普請について多くの成果が得られた調査であった。

出土した瓦では、丸瓦凹部に糸切によるコビキ痕が斜位につくコビキA手法と、コビキ痕が水平につくコビキB手法をはじめて報告されている(註10)。出土した大量の瓦はI期からVI期に時期区分され、I期の瓦は入江氏が城時代末期から高山右近在城時代とされている。三巴文軒丸瓦の特徴は、巴の頭が小さく、尾が長く全体として渦巻状を呈している。珠文は小さく、22個を数える。

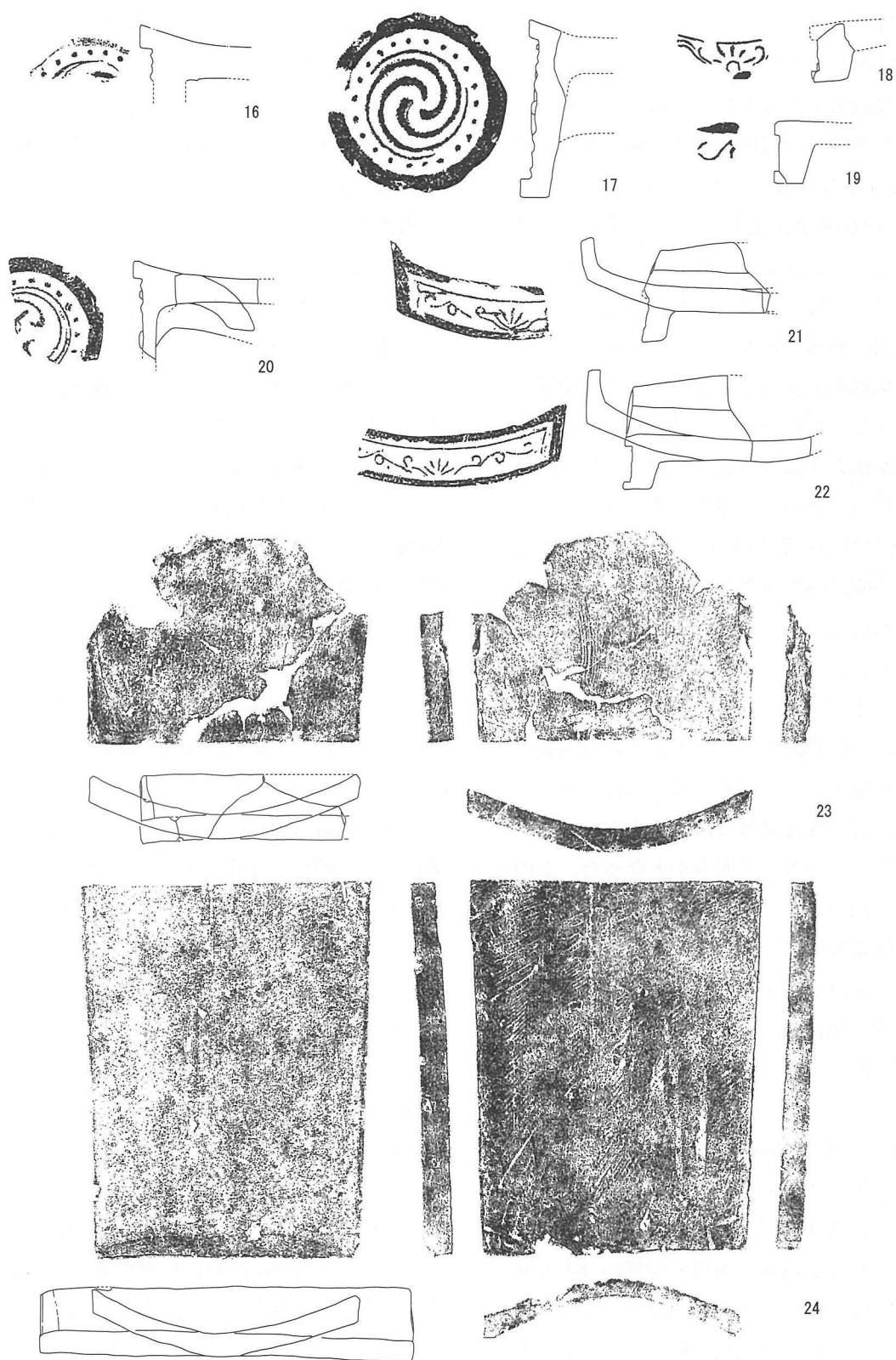
山城

・田辺城跡(京都府京田辺市田辺奥ノ城)

田辺城は、山城国一揆に登場する国人田辺氏の居城である。その築城年代などについては詳らかではない。

これまでに田辺町教育委員会、京都府埋蔵文化財調査研究センターによって発掘調査が実施されている。特に1996年の京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した調査では矢穴技法によって割られた花崗岩を用いた石垣が検出されている。この石垣は櫛形虎口に用いられていた。出土した遺物からこうした虎口や石垣が15世紀後半のものであることが確認され、大きな話題を呼んだ。

出土した軒瓦は小振りで、築地等に使われたも



16：芥川山城跡、17～19：高槻城跡
20～22：田辺城跡、23～24：鹿背山城跡

第2図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（2）

のと想定されている。軒平瓦は区画線が残り、三巴文軒丸瓦は圈線が残るという特徴より、15世紀後半の製作と考えられる（註11）。

・鹿背山城跡（京都府木津川市鹿曲田）

鹿背山城跡は標高141mの通称城山の山頂に選地しており、城跡からは眼下に木津川を望むことができる。

『大乘院寺社雑事記』には文明元年（1469）に興福寺六方の末寺である菩提院方に鹿山の名が見え、同じく文明11年（1479）には一乗院の御祈願所として鹿山の名が、さらには成身院順宣が賀世山に出張したこともみえる。こうした記録より15世紀には寺院的施設が鹿背山にあったことがうかがえる。

文明11年（1479）には狛氏や成身院、佐川父子が大和中川寺に出陣したのに対して、木津執行が加世山に退いたと記されており、木津氏に関わる城郭的施設も存在していたことが知られる。

その後『多聞院日記』永禄11年（1568）に多聞院の手の者たちが三好三人衆に追われてカセ山へ逃げ込んだと記されている。15世紀に興福寺によって構えられた城が、戦国時代には松永久秀による大和支配の北方防御の出城として大改修が加えられたものと考えられる。

その構造は南北約300m、東西約450mを測る巨大なもので、南山城最大の山城である。並列する3つの頂部を本郭と副郭とし、四方に派生する尾根上すべてを階段状に曲輪を配置しており、先端部には堀切が設けられている。本郭の西側尾根先端部と南端の副郭の周囲には畝状空堀群が巡らされている。

国史跡指定を目的して近年継続的に発掘調査がおこなわれている。その本郭から15世紀のものと考えられる平瓦が出土している（註12）。

・勝龍寺城跡（京都府長岡京市勝竜寺）

室町時代には乙訓郡役所として機能していたと

考えられる。元亀2年（1571）には織田信長より桂川以西の一職を任せられた細川藤孝によって改修されたものが現在残されている遺構と見られる。

発掘調査によって中心部分は石垣によって築かれていることが明らかとなり、枳形虎口も検出されている。また、大量の瓦が出土しており、石垣上の櫓や塀は瓦葺きの建物であったことがわかった。『東山殿御文庫記』に「殿主」で古今伝授のおこなわれたことが記されており、安土城に先行する天主の存在した城であることは特筆される。

出土した三巴文軒丸瓦は、巴の頭部が渦巻いて接しており、尾は長く次の巴の尾に接している。この軒丸瓦は坂本城跡、小丸城跡（福井県武生市）出土の三巴文軒丸瓦と同範であることが確認されている。

また、軒平瓦は中心飾りが5葉となり、その顎部に半円形の圈線を設け、中心飾りは旭日のようであり、左右に四反転する唐草文が施されている。また、本丸山城跡や若江城跡からも出土している、宝珠文の鬼瓦も出土している（註13）。

これらの瓦も元亀2年（1571）の細川藤孝による改修に用いられた瓦と見られ、坂本城跡出土瓦と同範関係にあることより、織田信長配下の築城に同一工人が動員されたことを示すものと考えられる。

大和

・多聞城跡（奈良市多門町）

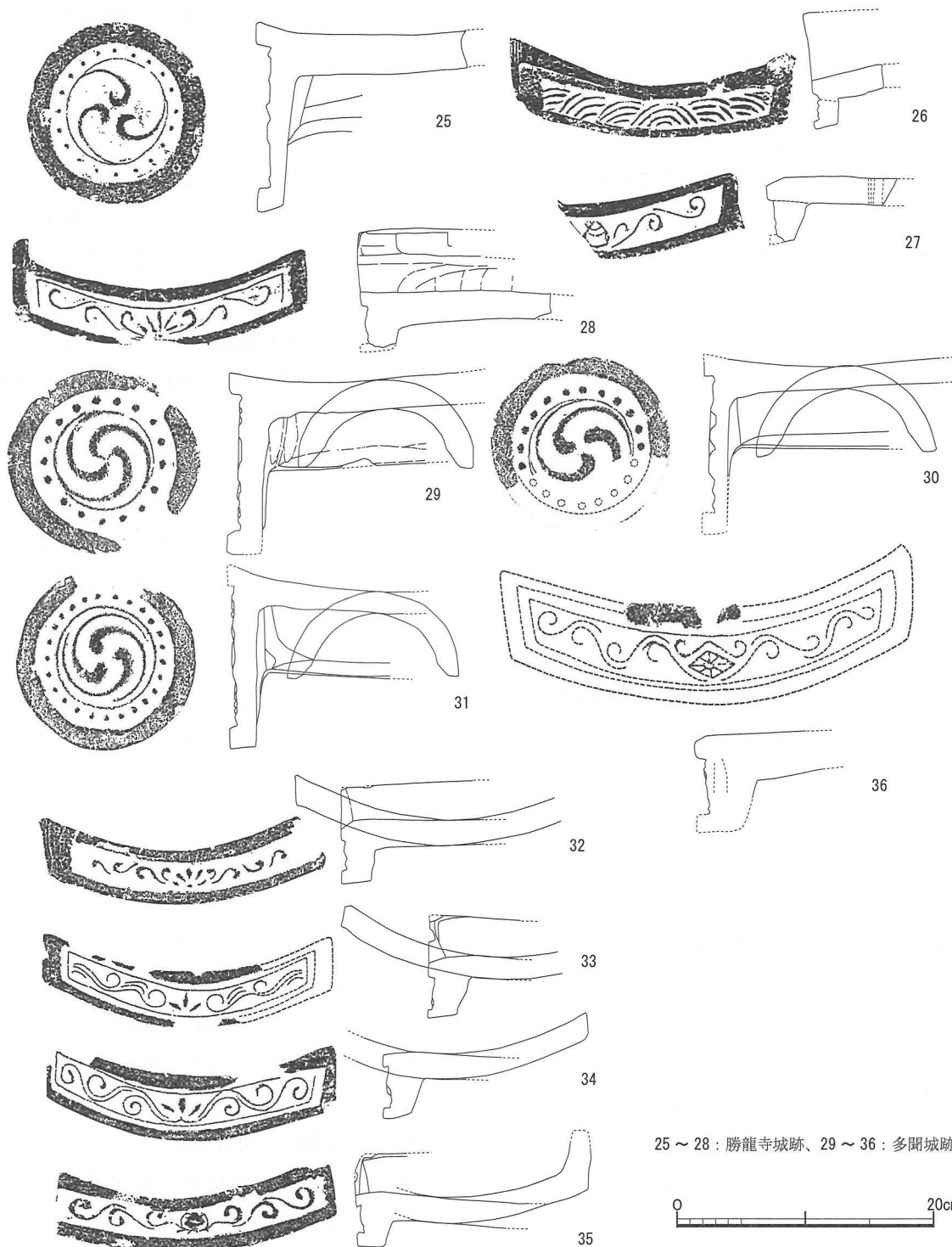
多聞城は永禄3年（1560）に松永久秀がその居城として築いた城である。久秀が織田信長に叛いて信貴山城で降伏すると、多聞城には明智光秀、柴田勝家が入城し、天正2年（1574）には信長が入城し、正倉院の蘭奢待を切り取っている。天正4年（1576）に筒井順慶が大和守護に任じられると、多聞城は破却された。

奈良市街の北方に位置する標高115mの小丘陵を利用して築かれた多聞城は破却されたうえに、

現在は中学校の校地となり、地形以外に城跡の遺構は認められない。ただ、宣教師の報告などから四重の建物をはじめ豪華な建物が建てられていたことが知られる。

また、発掘調査によって大量の瓦が出土してい

る。なかでも特徴が捉えられる軒平瓦について、山川均氏は南都の寺院の瓦そのものを転用した可能性は低く、多聞城の瓦として専用に製作されたものとし、大和の新たな覇者、松永久秀が旧来の寺社権門下の瓦工組織を解体・吸収し、新たに編



第3図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（3）

成した組織によって製作したものであったと想定している（註14）

こうした瓦について、ルイズ・アルメイダは「家及び塔は予が嘗て見たる中の最も良き瓦の種々の形あり又二指の厚さありて真黒なるものを似て覆へり。此の如き瓦は一度葺けば四五百年も更新する必要なし。」と記している。

・龍王山城跡（奈良県天理市柳本町）

龍王山城跡は大和の代表的な戦国時代の山城である。現在の橿原市域に勢力を持つ国人十市氏の山の城として築かれた。永禄5年（1562）頃に十市氏は松永久秀方に降り、以後松永方の城となる。天正3年（1575）には久秀の嫡男久通と十市おなへが祝言をあげ、龍王山城は実質的には久通の居城となる。しかし、天正5年（1577）に久通は久秀とともに織田信長に対して謀反を起こし、信貴山城で自害した。その後信長の手によって取り壊された。

城は標高 585.7m の龍王山の山頂に築かれた南城と、標高 521m 地点に築かれた北城からなる別城一郭タイプの構造となる。

南城では本郭の一段下の帯曲輪で発掘調査が実施され、礎石建物や庭園の遺構が見つかった。この調査で少量ではあるが瓦が出土している。瓦は丸瓦と平瓦しかなく、軒先瓦は認められない。瓦の詳細は不明であるが、コビキ A 手法が凹部に残り、年代的には松永氏時代のものと考えられる。

本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

・立野城（奈良県生駒郡三郷町立野）

立野城は、信貴山の南東部に位置している。ここは河内・大和の国境龍田越の要衝にあたる。周辺は大乗院方の国民である立野氏の本貫地であるが、立野城もその居城であったと考えられる。また、『大和志』には「信貴山城の子城が立野村に在る」とあり、松永久秀の信貴山城の南口を押え

る出城でもあった。

城は4つの曲輪群から構成されているが、いずれもが尾根上に構えられ、個々の独立性が極めて高い構造となっている。

1974年度と1980年度の2次にわたって発掘調査が実施され、D地区と呼ばれる北東部の曲輪からは2時期の建物跡が検出され、瓦が出土している。

出土した軒丸瓦は三巴文瓦、軒平瓦は中心飾りを宝珠文とする唐草文瓦であった（註15）。おそらく松永久秀によって築かれた立野城に葺かれたものと考えられる。

・椿井城跡（奈良県生駒郡平群町椿井・下垣内）

平群谷に構えられた椿井氏の居城である。戦国時代には嶋氏の居城だったようである。

城は矢田丘陵の南端、標高 318m の山頂に構えられている。その構造は北城と南城からなる別城一郭タイプである。南城には石垣が認められることより、北城と南城には構築に時間差が存在するようである。

瓦は南城から表採されている。現在知られている瓦は丸瓦2点、平瓦2点のみで、軒先瓦は認められない。丸瓦の凹部にはコビキ A 痕が残る。

龍王山城と同様に本瓦葺きの建物ではなく、板葺きか柿葺きの屋根の棟に用いられた瓦の可能性が高い。

近江

・坂本城跡（滋賀県大津市下阪本）

永禄11年（1568）に上洛する織田信長は南近江の守護六角氏の観音寺城を落して、南近江を支配下に置く。さらに元亀2年（1571）には比叡山を焼き討ちし、そこで明智光秀によって築かれたのが坂本城である。

城は北国海道（西近江路）に面した琵琶湖岸に位置し、本丸は琵琶湖に突出し、内堀、中堀、外堀は琵琶湖と直結していたと考えられる。『兼見

卿記』には「城中天主作事以下悉披見也。驚目了。」とあり、安土城に先行して天主の存在していたことがうかがえる。また、小天主の存在も知られており、連立式の天主であった可能性が高い。

天正10年(1582)の本能寺の変後、秀吉軍に攻められ落城するが、直ちに丹羽長秀によって再建され、杉原家次、浅野長政が城主となるが、天正14年(1586)に大津城が築かれ、廃城となる。城跡では数回の発掘調査がおこなわれている。なかでも本丸の一面に相当する湖岸の調査では焼土を挟んで2面の遺構面が検出されており、下層が明智光秀段階の、上層が丹羽長秀段階の遺構と見られる。

下層からは軒瓦に加え、鬼瓦や鯨瓦などを含む大量の瓦が出土している。Ⅱ類とされる三巴文軒丸瓦は、20個の珠文を配し、巴の頭は渦巻いて接している。また尾は長く次の尾と接している(註16)。このⅡ類は勝龍寺城跡出土瓦、小丸城跡出土瓦と同範関係にある。特に元龜2年(1571)に織田配下として細川藤孝が築いた勝龍寺城跡との同範は両城の瓦製作に同一の工人が動員されたことを示唆しており興味深い。坂本城でも天主が築かれ、瓦が葺かれているということは、この築城には織田信長の強い関与が認められる。あるいは技術的には信長の工人貸与、または信長主導による築城で、そこに光秀が配置されたことも考えられる。

・小谷城跡(滋賀県長浜市湖北町伊部)

小谷城は北近江の戦国大名浅井氏3代50年の居城で、戦国時代を代表する山城である。天正元年(1573)に織田信長軍に攻め落とされると、浅井氏の旧領は羽柴秀吉に与えられた。秀吉は天正3年(1575)に完成する長浜城に移るまで、少なくとも2年間は小谷城を居城としていた。

城の構造は大きく小谷山の山頂部に構えられた大嶽地区、中腹の尾根頂部に構えられた本丸・大広間地区、出丸として築かれた月所丸、福寿丸、

山崎丸、金吾丸、出丸と、山麓の清水谷からなる。

さて、こうした小谷城の構造は浅井氏時代に築かれたものと考えられ、昭和45年度より実施された本丸、大広間の発掘調査でも16世紀後半の遺物が出土している。

瓦はこのときの調査で1点も出土しておらず、浅井氏段階では瓦葺き建物は存在しない。ところが山麓で実施された、ほ場整備の際に備前焼の大甕とともに多量の瓦が出土したとのことである。発掘調査は実施されておらず詳細は不明であるが、地元に三巴文軒丸瓦1点と、丸瓦3点、平瓦1点のみ保管されている。

三巴文は頭部が接して、尾が長い。珠文は12個残存しており、おそらく16個めぐっていたと考えられる。坂本城跡や勝龍寺城跡出土の軒丸瓦に似るが、ややシャープさに欠け、これらよりは後出するものと考えられ、羽柴秀吉が小谷城主の時代に葺かれた瓦と考えられる。丸瓦の凹部にはコビキA痕が残る(註17)。

播磨

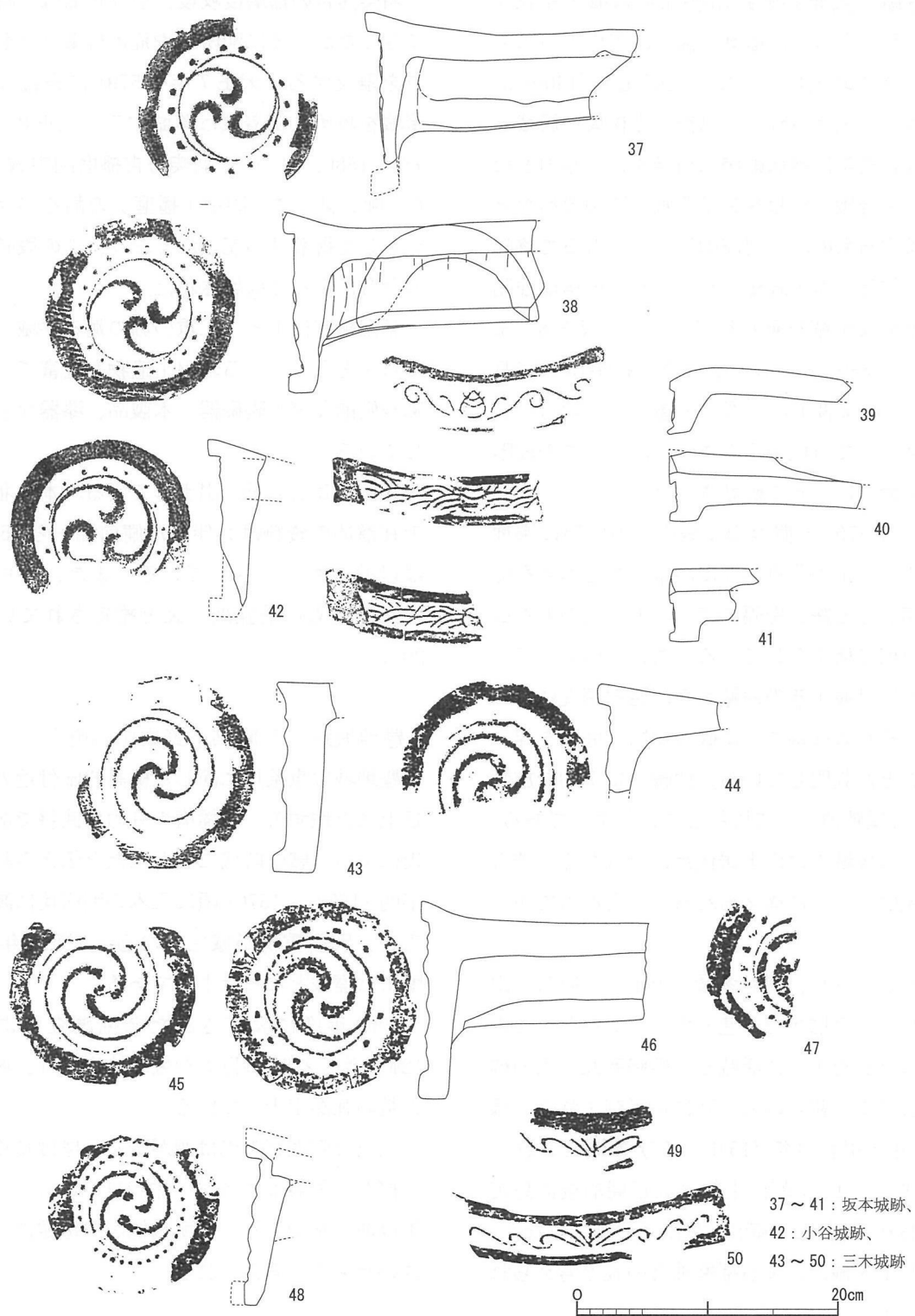
・三木城跡(兵庫県三木市上ノ丸町)

三木城の築城については詳らかではないが、別所則治によって築かれたとする説が有力である。以後別所氏の居城となり、永禄11年(1568)には織田信長の傘下となる。しかし天正6年(1578)に別所長治は信長方を離反し、毛利方となり、三木城に籠城する。これに対して信長軍は長大な包囲網を廻らせた攻城戦を繰り広げる。この戦いが有名な三木の干殺しである。

天正8年(1580)の落城後は城代が置かれていたが、天正13年(1585)に中川秀政が入城する。文禄3年(1594)に中川氏が豊後に移されると、豊臣氏の直轄地となり、城番が置かれた。慶長5年(1600)の関ヶ原合戦後は播磨は池田輝政領となり、三木城もその支城となり、伊木長門が城主として入れ置かれるが、元和の一国一城令で廃城となる。

城跡は舌状台地の先端に築かれているが、現在地上に痕跡は残していない。これまで数次にわたる発掘調査が実施され、瓦が出土している。田中幸夫氏によって、三木城跡出土瓦は4類に分類さ

れ、特に多く使われている軒丸瓦（1類）と、軒平瓦（3類）は当初基本として葺かれたものとされている。さらに近隣の寺院瓦との同範、同文関係より、1、3類は弘治から永禄年間（1558～



第4図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（4）

1570) に生産されたものであり、別所氏時代の三木城に瓦葺きの建物の存在したことを想定されている(註18)。

・置塩城跡(兵庫県姫路市夢前町宮置・糸田)

応仁の乱によって、播磨、備前、美作の旧領を回復した赤松政則によって、文明元年(1469)に築城されたと伝えられる。以後、赤松氏の居城となる。天正初年に赤松則房は羽柴秀吉の与力となり、賤ヶ岳合戦、小牧・長久手合戦、四国攻めなどにも参戦するものの、阿波国住吉へ一万石で移封される。信長、秀吉政権に与するが、則房は強制的に播磨の支配権を奪われてしまう。天正8、または9年(1580、81)の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」(一柳文書)に、国中(播磨)の割るべき城の覚えとして置塩城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

城は標高370mの置塩山(城山)の山頂に選地している。山頂の北東端部に詰城となる本丸を配し、堀切となる鞍部を隔てて二の丸、三の丸も広大な山頂部に構えられている。この二の丸、三の丸とそれに付属する帯曲輪からは発掘調査によって、それぞれの曲輪ごとに礎石建物、庭園を伴っていることが判明している。曲輪は軍事的な施設ではなく、屋敷地として機能していたようである。つまり、置塩城では山上居住だけではなく、被官たちの屋敷も山上に構えられる、山上都市であった。

石垣も多用され、瓦も多量に出土している。出土鳥衾瓦にヘラ描きで「甚六作」とあった。この甚六とは英賀を中心に活躍した姫路系瓦工人の橘国次の息子で、甚六の名で瓦に銘が刻まれるのは天文18年～弘治3年(1549～57)の間とされている。また、I-1郭出土瓦は天正期前後に想定されており、これらは織田、豊臣系の瓦ではなく、姫路系瓦工人橘氏による播磨独自の瓦と考えられる(註19)。

・御着城跡(兵庫県姫路市御国野町御着)

永正16年(1519)に赤松氏の一族である小寺政隆によって築かれたと伝えられる、小寺氏の居城である。

羽柴秀吉の播磨侵攻後、小寺政職は一時織田方に与したが、後に別所氏や荒木村重とともに織田方を離反する。天正7年(1579)に秀吉は播磨の諸城を攻め、御着城は落城する。天正8、または9年(1580、81)の「羽柴秀吉播磨国中城割り覚」(一柳文書)に、国中(播磨)の割るべき城の覚えとして御着城が記されており、この段階で秀吉の命令によって破城された。

発掘調査によって二重の堀の廻る平城の構造が明らかとなっている。出土遺物も豊富で、貿易陶磁や備前などの陶磁器、木製品、漆器などが出土している。

また、瓦も大量に出土している。本丸北トレンチ瓦溜めの資料は共伴した備前焼から15世紀半ば以前のものとされている。また、井戸1上層の瓦は御着城最盛期の瓦と推定されている(註20)。

・豊地城跡(兵庫県小野市中谷町)

豊地城は東条川に面した標高68m付近の河岸段丘上に立地する。東播磨の有力な武将である依藤氏によって戦国時代に築かれたと伝えられ、永禄年間(1558～1570)頃に三木の別所氏に滅ぼされると、別所重棟が城主となる。天正8年(1580)頃には廃城となったようである。

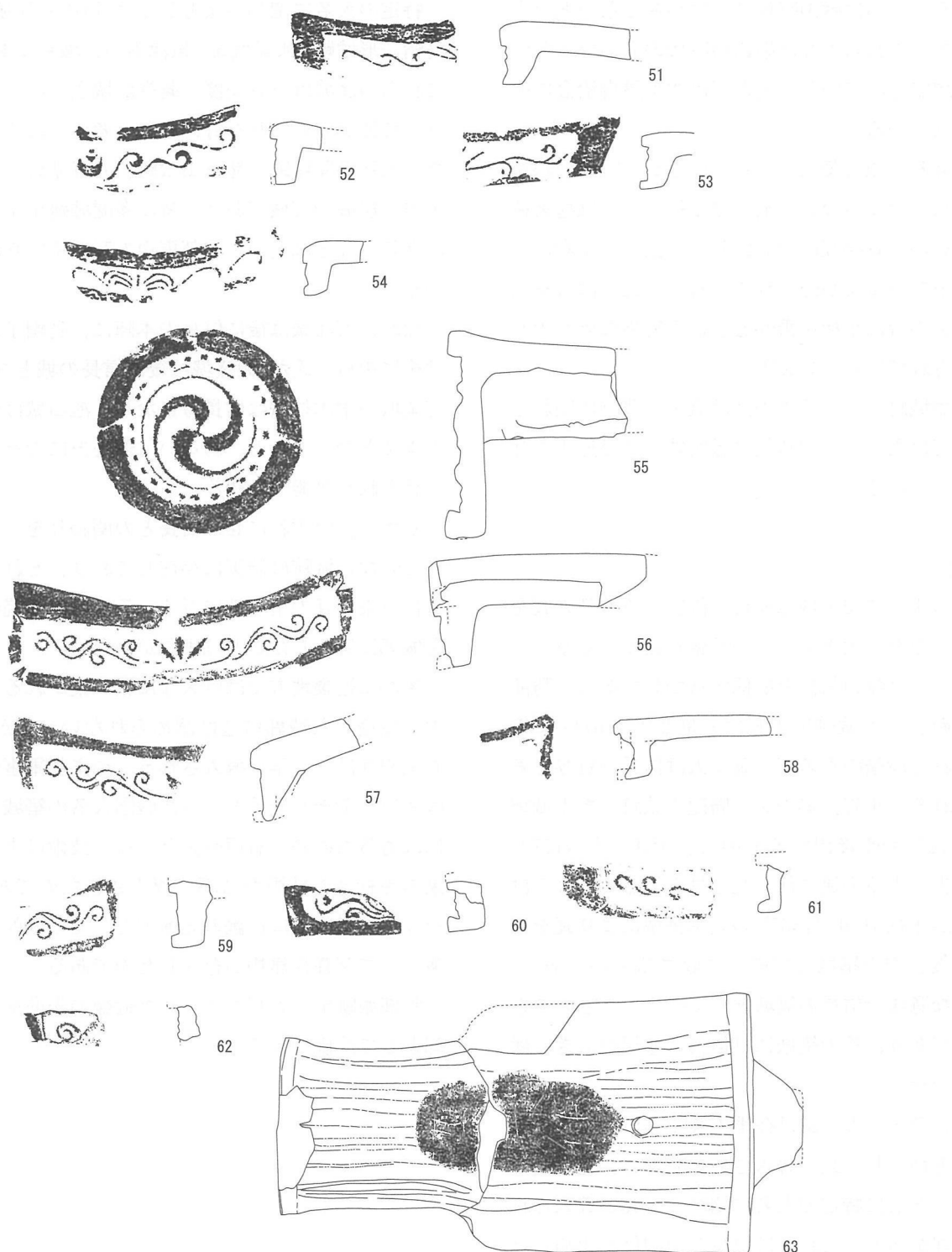
2009年度に実施された発掘調査により、幅12m、深さ2.5mの巨大な堀が検出され、堀内より大量の瓦が出土している。

三巴文軒丸瓦の巴は頭が接し、尾は長く次の尾に接し、圏線状をなす(註21)。これらは天正8年以前の瓦であり、別所重棟が豊地城に入城して葺いたものと考えられる。

・恒屋城跡（兵庫県姫路市香寺町恒屋）

恒屋城は赤松氏の被官恒屋氏の居城であるが、築城年代については詳らかではない。城は標高236mの常居山に築かれている。その構造は北端

の最高峰に構えられた後城と、南端に構えられた前城という別城一郭タイプとなる。いずれも階段状に曲輪を配するが、両城ともに西側斜面に畝状堅堀群を構える。山麓には、お屋敷、姫屋敷と呼



51～54：三木城跡、55～63：置塩城跡

第5図 近畿地方の戦国期城郭出土瓦（5）

ばれる居館が残る。

この恒屋城跡からは軒丸瓦、鳥衾、軒平瓦、鬼瓦が採集されている。通路部分より採集されていることより、塀や城門に葺かれていたものと考えられる。以前は戦国時代に瓦は存在しないという前提で、これらの瓦は姫路藩時代のものではないかと想定されていた。現在瓦は北恒屋自治会に所蔵されている。

軒丸瓦は銀杏葉文とされているが、家紋の銀杏には当てはまらない。最も似る紋としては抱茗荷紋に近い。軒平瓦は中心飾りが三巴で、左右に四反転飛び唐草文が配されている。鬼瓦には舌を出した亀の背に小槌を乗せるという特異な姿が中心に配されている（註22）。

置塩城跡と同じくこの瓦は織田、豊臣に関わるものではなく、戦国時代に播磨独自で発達する瓦と考えられる。

考察

このように安土城に先行、併行する城郭の瓦を分析すると、大きく二つの系譜が見えてくる。

ひとつは織田信長と関係する城郭である。勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦は元亀2年（1571）に築城された段階のもので、瓦工人は信長の貸与と考えられる。小谷城跡の瓦も勝龍寺城跡、坂本城跡出土瓦にやや後出するもので、天正元年（1573）の秀吉による再建に伴う瓦と見られる。これらは信長が永禄10年（1567）の岐阜築城により瓦を用いた後、安土築城までの間に収まるものであり、大きな意味で信長の築城として捉えることのできる城であり、その築城には信長の意思が大きく働いていた。

今、ひとつの系譜は在地の瓦であるが、ここには先進地として瓦が導入された城郭と、先進地であるとともに特定の大名に関わって瓦が導入された城郭がある。これらは信長との関係が認められないもので、先進地としての瓦は河内私部城跡、津田城跡、本丸山城跡、摂津有岡城跡、池田城跡、

高槻城跡、山城田辺城跡、鹿背山城跡、大和椿井城跡、播磨三木城跡、置塩城跡、御着城跡、豊地城跡、恒屋城跡である。これらは大和や播磨の瓦工に関わったものである。

特定の大名に関わる城としては、河内若江城跡、烏帽子形城跡、飯盛城跡、摂津芥川山城跡である。これらの諸城は三好長慶、義継が城主となっており、長慶が城郭に瓦を導入したと考えられる。また、大和多聞城跡、龍王山城跡、立野城跡は松永久秀の居城や支城であり、特に多聞城跡出土瓦には寺院の瓦とは違い、城郭専用の瓦が用いられている。

なお、若江城は後に信長の本陣に、烏帽子形城は後に中村一氏が、飯盛城は後に信長の城となり、有岡城の荒木村重は信長方となり、池田城は信長の本陣となっている。あるいは信長方になってから葺かれた可能性も残る。

しかし、いずれにせよ信長との関わりを一切見いだせない城跡は確実に存在しており、それらは古代以来の瓦の生産地に近く、そうした寺院の瓦を城郭に導入したことはまちがいない。

確かに近畿地方では巨大な山城は築かれるものの、発達した城郭構造は認められない。しかし、石垣や瓦はいち早く導入される。つまり軍事的には武田氏や後北条氏といった戦国大名の築城技術には劣るものの、石垣や瓦といった技術は古代以来の寺社造営技術が城郭に導入されたのである。そうした意味では近畿の先進地としての城郭の特徴として瓦葺き建物が存在したのである。

私部城跡出土の瓦もこうした近畿の先進地の城郭として評価できる。

IV おわりに

さて、拙稿では私部城跡を構造と攻城戦からと、出土した瓦から分析を試みた。とりわけ安土城に先行する瓦に焦点をあてて、広く近畿地方の瓦が出土した城館跡を集成して分析した。その結果、私部城は安土城に先行して瓦を城に導入した、先進地の城郭であることが明らかにできた。

構造面では、大阪府においては平地に残る極めて貴重な城跡であることが改めて確認できた。しかし、一方では城跡付近にまで開発がおよんでおり、危機的な状況となっている。今後、国史跡に指定され、末永く保存されることが望まれる。大阪府では河内長野市で烏帽子形城跡が実に79年ぶりに中世城館跡として国史跡に指定されている。私部城跡がそれに続くことを望みたい。

註

1. (財)大阪府文化財センター 2011『私部南遺跡Ⅲ 有池遺跡・上私部遺跡・上の山遺跡』
なお、交野南遺跡からこの堀跡が検出されていることは、交野市教育委員会の吉田知史氏からご教示を得た。
2. 小川暢子 1995『私部城跡 - 発掘調査概要報告書 1-』交野市教育委員会
3. 吉田知史 2014「大阪府枚方市津田城（本丸山城）」『城郭談話会 30 周年特別例会「一人一城」レジメ集』城郭談話会
4. 馬部隆弘 2004「津田城 - 付、本丸山城」『図説近畿中世城郭事典』城郭談話会
5. 東大阪市立郷土博物館 2005『なぞの城 - 発掘調査からみた若江城 -』
6. 太田宏明他 2011『河内長野市指定史跡烏帽子形城跡総合調査報告書』河内長野市教育委員会
7. 鈴木充他 1977『伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ』伊丹市文化財保存協会
8. 田上雅則 1991『池田城跡 - 主郭部発掘調査概要報告 2-』池田市教育委員会
9. 橋本久和 1994「V 芥川山城跡」『嶋上遺跡群 18』高槻市教育委員会
10. 森田克行 1984『摂津高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
11. 石尾政信 1996「田辺城跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 62 号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
12. 中島正 2010「鹿背山城跡第 1・2 次発掘調査概報」『木津川市内遺跡発掘調査概報Ⅱ』木津川市教育委員会
13. 岩崎誠他 1991『勝龍寺城発掘調査報告』(財)長岡京市埋蔵文化財センター
14. 山川均 1996「城郭瓦の創製とその展開に関する覚書」『織豊城郭』第 3 号 織豊期城郭研究会
15. 中村博司 2014「安土築城以前の瓦」『中世城館の考古学』高志書院
16. 吉水眞彦 2008『坂本城跡発掘調査報告書』大津市教育委員会
17. 中井均 1994「小谷城跡出土の瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
18. 田中幸夫 1994「三木城出土瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会
19. 山上雅弘他 2006『播磨置塩城跡発掘調査報告書』夢前町教育委員会
20. 秋枝芳他 1981『御着城跡発掘調査概報』姫路市教育委員会
21. 兵庫県立考古博物館 2010『ひょうごの遺跡』75 号
22. 伊丹市立博物館 1979『第 10 回特別展 荒木村重と伊丹城』